

論 述

注 意

1. 問題は全部で8ページである。
2. 解答用紙と下書き用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。
3. 解答はすべて解答用紙に縦書きで記入すること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
5. 解答用紙および下書き用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

次の文章を読み、以下の間に答えなさい。

問一 本文中の空欄

1

 から

5

 に入れるのに最も適切な語を以下の①～⑤から選び、その記号を解答欄に記入しな

さい。解答用紙(その一)を使用

- ① 逆転 ② 死 ③ 定理 ④ 動揺 ⑤ 秘密 ⑥ 不信 ⑦ 無為

問二 傍線部(a)「ベク先生の生徒に対する態度は真に立派なものである。」と筆者が考える理由を二〇字以内で要約しなさい。解答用紙(その二)を使用

問三 傍線部(b)「子どもたちは非常によく知っている。彼らはその成長にあたって正義先生も禁煙先生も両方必要としているのである。」と筆者は述べています。筆者はなぜそう考えるのか、本文に即して簡潔に説明したうえで、この考えに対するあなたの意見を述べなさい。(八〇〇字以内)解答用紙(その二)を使用

エーリヒ・ケストナーの『飛ぶ教室』を読んで、これは古きよき時代の学校のことであって、「この頃の中学生は、こんなのとまらつきり違う」と言う先生もあるかも知れない。とかく、大人どもは、昔はよかつたが今は悪い、と思いたがる。このような人には、私は次の二点を指摘しておきたい。まず第一に、ケストナーがこの本の「第二のまえがき」のなかで述べているように、「どうしておとなはそんなにじぶんの子どもをすっかり忘れることができるのでしょうか?」ということである(以下、引用はすべて、高橋健二訳『飛ぶ教室』岩波書店、による)。第二には、この本が書かれた一九三三年とは、どんな時だったか御存知ですかと言いたい。この年にドイツではヒトラーが政権を取り、「焚書」を実行した。ケストナーもまた、『飛ぶ教室』を最後に、その著作を焼かれ、出版禁止の処分を受けた。ケストナーは、人間の行う測り知れぬ「暴力」を予感しつつ、この書物を書いたのである。

この小説の舞台はキルヒベルクの高等中学というようになっており、活躍するのは、生徒たちとそれを取り巻く人々、それも徹頭徹尾、男たちの物語であるところが特徴的である。これは思春期前期の男の子たちを描いた作品として、白眉と言っていいもの

だろう。思春期前期、それは人生のなかで最もわけのわからない時代である。ともかく、生きていくことは事実だが、本人たちもわけがわからないままに行動しているのだから大変である。ケストナーは大人たちが自分の子どもだった頃をよく忘れると嘆くが、実のところ、思春期の頃はことは忘れて当り前、あるいは、記憶できないものなのである。それをよく覚えていて、しかもひとつの作品にして見せるところに、ケストナーの天才がはたらいている。この年齢の子どもたちは、よく行動する(あるいは、反転してまったくの) 1 になる子もあるが)。跳び、走り、なぐり、蹴る。怒り、笑い、泣き、どなり合う。しかし、そのような行為の背後で、彼らを動かしているものの存在には気づくことがないのである。それにうっかり気づかされる運命にある子は、大変な精神的危機に見舞われることになるだろう。だから、この子どもたちはともかく動いていないといけないのだ。

『飛ぶ教室』で活躍する愉快な少年たちをまず紹介しておこう。高等科一年生たちで、拳闘選手をめざす腕力の強いマチアス、それとまったく対照的な友人、貴族出身でひ弱いちびのウリー、貧しい給費生で秀才で正義漢のマルチン、それと、薄幸な孤児のヨーニーである。話の始まりには、この年齢の子どもたちの発散する活気に満ちている校庭の様子が生き生きと描かれている。雪合戦をするもの、木をゆずぶつて雪を他人の頭の上に落とすもの、「タバコをすいながら、がいつのえりを高くたてて、もったいぶった足どりで」歩いてゆく上級生。それに「四階のせまい窓のふちの上で、危うくからだの平均をとりながら壁にそって部屋から部屋へと、移って」拍手をされるヒーローさえいる。少年たちは活気に満ち、しかも意外に 2 に近接した世界を生きているのである。

さて、既述の高等科一年生の同級生たちが、クリスマスのお祝いに演じるために、ヨーニー作「飛ぶ教室」という五幕物の演劇の練習をしているとき、同級生のフリドリが、「顔と手からは血がたれ、服は破れ」た姿で、とびこんできた。フリドリによれば、同級生のクロイツカムは町で実業学校の生徒に襲われ、クロイツカムはとりこになり、彼の持っていた同級生全員の書き取り帳もとられてしまったという。もう劇の練習どころではない。リーダー格のマルチンは主要なものに「禁煙先生」のところに集まるんだ」と命令し、一同あわただしく立ち去るところで第一章が終る。これはまったく、素晴らしい演劇の第一幕の終りのようなものだ。われわれは緊迫した気持のまま第二章を待ち受ける。それに禁煙先生というのは、一体誰なのか。

少年たちにとつての重大事件の發生に際して、彼らがまず第一に禁煙先生に相談しようとしたところが興味深い。禁煙先生については後でも考察するが、彼は本名不詳の「世すて人」で、廃車になつて菜園の中に持ちこまれた禁煙専用の客車に住んでいる。それが禁煙先生の名の由来であるが、彼自身は大変よく煙草を吸う——ケストナーも煙草好きである——のだから、なかなかユーモラスな命名なのである。少年たちは禁煙先生が大好きである。彼らは舎監のベク先生を深く尊敬している。ベク先生は正義先生というあだ名があるほど正しい人のだが、それだからこそ、こんなときには相談の相手にはなりにくいのである。「正と不正とを区別することが困難なような場合、彼らはちえを借りる必要があります。そういう時、彼らは正義先生のところにはいかないで、大いそぎでかきねを越えて禁煙先生をたずねていくのでした。」思春期の子どもたちは「正義先生」も必要だが、それ以外の指導者も必要としているのである。さて、これから少年たちのなぐり合いの大活劇がはじまるのだが、その詳細は本文に譲ることとして、この少年たちの戦いについて少し考えてみよう。

われわれは暴力を肯定するものではない。しかし、すべての少年たちから腕力の戦いを取りあげてしまつたら、世の中は平和になるだろうか。答は明らかに否である。少年たちの攻撃性を徹底的におさえるようなことは昔はできない相談であつた。そうしうにも大人たちは忙しすぎたし、子どもたちもたくさん居た。ところが、最近ではそのような「純粹培養」みたいな子どもたちをつくることが可能となつた。ところで、このように育てられた子どもたちが、思春期になつてその攻撃性を突発させると、どんな恐ろしいことが起こるかを、われわれは毎日のように見せられている。今、わが国に多発している家庭内暴力がどんなに凄まじいものであるかは、周知のことであろう。あるいは、校内暴力もこれと関連してくるだろう。それはジャーナリズムを賑わしているように、時に殺人事件にまで及ぶものなのである。

『飛ぶ教室』の少年たちのけんかも相当なものだ。顔の相が変わるほどの凄まじいなぐり合いをやっている。まったくむちゃくちゃである。しかし、思春期の子たちは、時にむちゃくちゃをやらぬことには生きてゆけないのである。彼らの心の奥底でうごめいているもの、それはそのまま暴発すれば死に直結する類のものである。彼らは命を失わずに、それをある程度生きねばならぬ。

暴力は肯定か否定か、このような単純な割り切り方で、いつでも通用する一面的な
3 を得ようとするような人は、あま
りにも弱い人だ。矛盾する二つの極の間に身をおいて耐えてゆきながら、その時にその場で正しい道を切り拓く強靱さをわれわれは身につけなければならぬ。ケストナーのこのような強靱さこそ、ナチスドイツに踏みとどまり、亡命することなく抵抗運動を続けるような偉大なことをする原動力となったものであろう。ケストナーは、「第二のまえがき」のなかで、児童文学の「ずるい作者は、子どもというものが、極上のお菓子のこね粉でできてでもいるように」扱うのを鋭く批判している。子どもたちは小さいときから、上述したような人生の矛盾のなかで、悩み、戦っているのである。どうしてそのことを児童文学のなかで取り扱ってはいけないのか、とケストナーは主張する。彼は現実を直視して、それを子どもたちに告げる。しかし、有難いことに彼の鋭い目は愛にも満ちているのである。

思春期はむちゃくちゃな時期であると言った。少年たちから腕力をすべて取りあげるのは問題だと言った。それでは親や教師たちは、このむちゃくちゃな族に対して、どうすればよいのか。暴力や無軌道ぶりに対して「暖かい理解を示す」べきなのであろうか。寄宿舎の規則を破り、無断外出をして名誉ある戦いを勝ちとってきた少年たちに対して、舎監のベク先生、つまり正義先生はどのように対処しただろう。ここは『飛ぶ教室』の圧巻である。五人の少年たちは寄宿舎に帰ってきたところを、意地悪の上級生テオドルに見つけられ、正義先生のところへ連れてゆかれる。「脱走者をつかまえてまいりました」と、テオドルは大喜びである。さて、「ベク先生は机に向かってこしかけたまま、五人の高等科一年生をじろじろ見ました。先生が何を考えているか、顔いろにはいっこう表われていませんでした」。先生は少年たちが簡単に触れることのできぬ壁のように、前面に屹立しているのだ。これが大切なことなのである。

ベク先生は生徒たちが規則に背いたことを明確にし、なぜそんなことをしたかを尋ねる。少年たちは実業学校生に同級生が捕虜となったので救出にゆき、そこで戦ったことを話す。捕虜は救い出したものの、書き取り帳は敵に焼かれてしまったので、灰だけを持ち帰ってきたことを告げ、マチアスが「ほくはその灰をいれるために骨つぼを寄付します」と冗談を言うのと、「ベク先生はかすかに顔をほころばせました。しかし微笑したのはほんの十分の一秒のことで、すぐまたまじめな顔にかえりました」。規則違反の

生徒たちだからと言って、その冗談に笑わないというのも余裕がなさすぎる。かと言って、笑ってしまったのは緊張感がなくなる。この際十分の一秒は微笑するのに適切な長さだ。

ベク先生は二週間の外出禁止にすべきところだが情状をくみとることはできると言い、それにしても、なぜ無断外出する前に自分のところに相談に来なかつたのか、「それほどわたしを信頼していないのか？」と真剣に聞く。生徒たちは、先生に事前に相談しても、たとえ外出を禁止されても自分たちはそれを破るだろうし、もし先生が外出を許し、けんかのために事故が生じたら先生の責任になるだろう。だから、先生に迷惑をかけるよりは、自分たちの判断で無断外出し、その責任をとることにしたと言う。ベク先生はそこで、「休暇後最初の午後の外出をきみたちに禁止する」と罰を言い渡した後、「その罰にあたる午後、きみたち五人はわたしのお客としてこの部屋にまねかれる。そしてコーヒーを飲みながらだべろう」とつけ足すのである。なんとも、いきなはからいだが、話はこれで終わらない。ベク先生は自分が高等科一年生のときの思い出話をする。彼は病気の母を見舞うために無断外出して上級生に見つかり、翌日の外出を禁止される。彼はそれでもまた外出して母を見舞い、ついに監禁される。ところが彼の友人が身代りになってくれ、母のところへ行ったのだが、その間に校長先生が身代りを発見して怒る。しかし、校長先生には、その友人がすべてを話して許されたのである。ベク先生は、自分が高校生するときから信頼できる先生が居なかつたばかりに、無断外出を繰り返して苦しんだので、「少年たちが心のなやみとすることをなんでもいえるような人」になろうとして舎監になったのである。少年たちは感激して、部屋を出てから、マチアスは「あの先生のためなら、ぼくは必要とあれば、首をくぐられてもいい」と言う。

(a) ベク先生の生徒に対する態度は真に立派なものである。大したものだ。思春期の子どもたちの心の奥底で荒れ狂う力は、それに直面して退くことのない壁を必要とする。それにぶち当り、せきとめられることによってこそ、それは分化し、人間に利用できるものへと変容する。さもなければ、それはひたすら破壊的に作用し、その子ども自身がその被害者となってしまう。家庭内暴力や校内暴力をふるう子どもたちは、自分の内なる暴力のほしいままにされている被害者なのである。そして、これがいったん暴発してしまうと、なかなか簡単にはとめ難く、おそまきながらそれに直面しようとした人など、たちどころにぶつとばされてしまう。

ベク先生は「何を考えているか、顔いろにはいつこう現わ」ささない、不退転の壁として少年たちの前に立っている。しかし、その壁には血が流れていないといけな。少年たちの規則違反は違反として明らかにしてゆく過程のなかで、少年たちは前に存在している壁に血が通っていることを、だんだんと感じてゆく。そして、最後のところで、ベク先生は自分自身も少年たちと何ら変りのない存在であることを明らかにする。病気の母を見舞つての無断外出は、実のところケストナー自身の体験を基にしているだけに、こここのところは読者の胸を打つものがある。

ベク先生は「少年たちが心のなやみとするところをなんでもいえるような人」になろうとして舎監になった。しかし、五人の少年たちは、いかに信頼している先生に対してでも言えないことがあることを、ベク先生に納得させているのだ。少年たちは先生に秘密をもって行動した——もちろん、後で言ってくれはしたが——しかも、それは先生を敬愛しているが故になのである。

いかに愛し合っているにも、愛し合っているが故に、

4

をもたねばならぬときがある。教師として生徒になんでも言つて

貰おうとするのは甘すぎる。この人生のパラドックスを、ベク先生は生徒たちに教えられたのである。先生はそのお礼として、彼らにコーヒーを御馳走することにしたのである。教師と生徒の関係が深まっていったとき、

5

が生じて、生徒が教師に

何かを教えてくれることは、よく生じることである。しかし、それは教師が最初から姿勢をくずして、生徒たちと同等にふるまうことによつて生じるものではない。教師は権威者として、生徒に嫌われようが怒られようが、まず前面に立ちはだからねばならない。その心意気のなかから、価値ある逆転が生じるのだ。自分は権威も何もなく、生徒と同等だとか友人だとか主張する先生が居られる。それはそれで立派かも知れないが、そこまで頑張る先生は、まず給料など貰わずに、授業料を払うことから始めるべきだ、と私は思っている。

思春期の暴風雨と対決するためには、教師は強い権威をもたねばならない。しかし、そうあることは、ベク先生の例でも解るように、生徒たちとは決して同等にはなれぬという孤独も味わわねばならない。孤独に耐えることなく権威をもとうとするのは、働かないで食うのよりなお悪い。後者は少しは罪悪感をもつだろうが、前者は案外、自分のことを同情心が深いなどと錯覚することがある。

子どもたち、特に思春期の子どもたちには権威者が必要である。しかし、権威者が権威者であるためには、どこか一般人と異なる不自由をしのび、孤独に耐えて生きねばならない。皆となじんでしまつては、権威者であることができない。おそらく、ベク先生あたりが教師の理想像かも知れないが、それじゃ禁煙先生はどうかという疑問が生じてくるであろう。

ベク先生を一つの目とするならば、禁煙先生はこの物語のなかのもう一つの目である。ヒトラーが台頭し、確信に満ちた指導者像がドイツ国民の理想となろうとしているとき、ケストナーがこのような人生の師の姿を描き出したことは、真に意義が深い。一九三三年のドイツにおいて、このような人物を描くことにさえ相当な勇気がいったのではないかと思う。ナチスにとつて、何が正しいか何が正しくないかは、まったく明白であつた。彼らの絶対的な指導者ヒトラーがそれを決めてくれた。他人の判断や、イデオロギーに頼ることなく、われわれが何が正しいかを判断しようとするとき、途方もない困難に出会う。しかし、その困難に自らの存在を賭けてぶつかつてゆくことこそが人生だと、ケストナーは言いたいのだ。しかし、思春期の子どもたちにとつては、やはり指導者が必要とするものだ。ここでケストナーが「正と不正とを区別することが困難な場合」は、正義先生に相談できないことを明らかにしているのは、何とも素晴らしい。彼らが相談できるのは、煙草をぶかぶかと吸いまくる禁煙先生なのである。つまり、禁煙先生は正義先生と違って、正も不正も内包しているのである。権威者は孤独を必要と言つた。そうすると、禁煙先生はこんなときでさえ子どもたちに相談され、秘密を打ちあけられ、何らの孤独も経験しなくてすむ人なのであるか。禁煙先生の孤独は、ある意味ではベク先生よりも深いかも知れない。彼は世すて人なのである。禁煙車のなかにひとり住み、場末のレストランでピアノを弾き、ほそほそと生きているのだ。彼は子どもたちの世界に入れて貰つた分だけ、大人の世界から遠ざからねばならぬのである。

大人と子どもとを言えば、ここにもパラドックスが存在しているようだ。実は禁煙先生こそ、ベク先生が無断外出したときの身代りとなつてくれた友人であることを、少年たちは感づいて、ベク先生と禁煙先生とを引き合わせるのだが、そこでベク先生は禁煙先生に「ふつうの市民の生活」に戻ることをすすめる。これには賛成しない禁煙先生に対して、ベク先生は彼が医者であることを知っているの、この学校の校医となることをすすめる。これに対して、禁煙先生は、「生活に野心を失つてはならないなんていう、

きまりもんくだけは、もちださないでくれたまえ。……ほんとにたいせつなことを思いだす時間をもつ人が、もっと多くいてほしい、と思うんだ。金と位と名誉なんて、子どもじみたものじゃないか！ そんなものは、たかがおもちゃにすぎないよ。ほんとにおとなはそんなものをあいてにじやしない」と答えている。私は、禁煙先生は子どもの世界に近づいた分だけ大人の世界から遠ざからねばならなかった、などと書いたのに、ここで御当人は自分こそが、ほんとの大人であり他の大人たちはまったく「子どもじみている」と主張しているのである。金と位と名誉と、そのような子どもじみたものを欲しがるのが大人なのか、そんなものはまったく棄て去っている人が大人なのか。ここでもわれわれは二者択一的な単純な思考にとらわれないことにしよう。^(b)子どもたちは非常によく知っている。彼らはその成長にあたって正義先生も禁煙先生も両方必要としているのである。

(河合隼雄「エーリヒ・ケストナー『飛ぶ教室』」による。原文の字句を一部改変、省略した。)

